大学入学試験制度における特別選抜の日中比較研究

宮　　玉　婷

【研究目的】

中国において、大学に入って勉強するためには、入学試験を受けなければならない。中国の大学入試制度は、「全国普通学校招生考試」と一般入試と「大学個別学生募集」という特別選抜試験からなされている。「全国普通学校招生考試」は年度一回行われ、選抜方法は筆記試験であり、その成績順により優秀な学生が選抜される。テストの内容は、各省による統一した内容の問題が出題され、各省が定員数とテストの点数による合格ラインを確定する。

しかしながら、2000 年以降、入学志願者の能力・適性等を多面的に判定することが活発に唱われ始めた。つまり、受験生の個性や能力を測る大学入試の取組を進めていく必要があるとされている。このような大学入試改革の一環として、新しい入学者選抜方法が導入された。2003 年に 22 校の大学に導入された「大学個別学生募集」（中国語で「自主招生」）である。これにより、個別大学に入学試験で入学者を選抜する権利が認められた。この大学個別試験に受かった者は、「全国普通学校招生考試」で取った点数（満点 750 点）に 20 点ほど加点される。

2010 年からは、北京大学の「中学校長実名推薦」が「大学個別学生募集」の新しい形態として実施されることとなった。この入試における受験資格は、高等学校の優秀な総合成績・能力を有する者、或いは特定の教科の優秀な成績を有する者に限定される。北京大学への推薦の資格を持つ高等学校は、定員枠内で優秀な生徒を推薦する。

上述のような新しく導入された入試は、「全国普通学校招生考試」の成績だけではなく、適性と総合能力によって受験生を選抜する入試であり、個性を求めている入試であると考えられる。しかし、こうした大学入試改革はまだ開発途中であり、その割合が総定員数の僅か 5%以内と規定されている。今後の大学入学者選抜において、受験生の多様な個性や能力・適性等を幅広く評価していくことが必要であると考える。

日本の大学入試は「一般入試」と特別選抜の「推薦入試」、「アドミッション・オフィス入試」（AO 入試）等からなされている。上の中国の入試制度と比較すれば、「一般入試」においては、大学入学センター試験を利用する大学が多いということから、中国の「全国普通学校招生考試」による大学入試に対応している。「推薦入試」とは、大学が出身校からの推薦を受けた受験生を選抜して入学させる入試である。これは中国の「中学校長実名推薦」に対応している。出願理由書や活動履歴書等や面接試験などにより出願者の個性や適性に対して多面的な評価を行い、合格者を選抜する方法が「AO 入試」と呼ばれ、中国の「大学個別学生募集」に対応している。このような共通性を考慮し、両国の入試制度の類似性が認められる。

日本では、「推薦入試」は 1966 年度に導入され、「AO 入試」は 1990 年度に導入され、中国に比し

て長年の改革・改善の経験を持っている。本研究では、中国と日本の大学入試制度、特に特別選抜試験に焦点を当て、比較研究し、今後の中国の大学入試改革のあり方を模索・検討することを目的とする。

【研究内容】

本研究では、まず、中国における新しい大学入試の具体的な問題点を明らかにする。これに基づき、日中の大学入試を比較する枠組みを設定する。事例としては筑波大学と北京大学を考えている。筑波大学は日本の国立大学で初めて AO 入試を導入した大学であり、現在も全学的に実施しているため、事例として選定した。また、北京大学は中国で初めて「中学校長実名推薦」を導入した大学である。次に、比較分析枠組みとしては、特別選抜の入試の形式、実施回数、定員数の全体に占める割合、試験内容及び成績の判定規準等を指標として考えている。

【研究方法及び計画】

修士１年：中国における新しい大学入試と日本における大学の特別選抜試験の現状を調査し、中国の大学入試改革の問題点を検討した上で、日中比較の枠組みを設定する。

修士２年：筑波大学と北京大学を事例として、日中の大学入試の特別選抜試験について比較・検討する。

【研究の特色及び意義】

何よりも、日本の国立大学で初めて AO 入試を導入した筑波大学を事例として研究することが本研究の特徴である。今後の中国における新しい大学入試の開発・改善、そして大学教育の質の向上のために、本研究は意義があると考える。

宮 玉婷（筑波大学大学院人間総合科学研究科 研究生）